

# 学校建築の現状と展望

## —教育と建築とのかかわり合いを通じて—

大串不二雄

### I. はじめに

小・中学校の学習指導要領は昭和52年に、また高等学校の学習指導要領は昭和53年に大きく改訂された。小・中学校のそれまでの学習指導要領は、内容が過剰であり、また難しすぎるという批判に答えて、これを基本的な改訂したものである。今回の改訂によって、授業時間は約1割削減された。内容に精選することによって、約3割程度学習の負担が軽減されることになったといわれる。また、高等学校では、高校教育を受ける生徒の多様性に応ずるために、教科の選択の内容と申が拡大された。

学習指導要領の改訂は、教育課程そのものの改訂を意味するが、教育課程とは、教育の目標、内容、教育の方法などを具体的に定めるものであるが、今回の改訂では、教育課程の編成そのものを、学習指導要領を基としつつも、その運営については、それぞれ学校の自主性に大串にゆだねられるように改められている。今回の改訂の趣旨を一言にいえば、それは教育のゆとりと充実をねらったものであるといわれる。それは教育を受ける子供にとつてのゆとりと充実であると同時に、教育を受ける側の教師にとつてもゆとりと充実を意味するものである。このことを始めるに述べたのは、これまでの学校教育、したがってまた学校建築のマンネリズム化の打破が可能になると考えられるからである。

### II. 学校建築のマンネリズム化

これまでの学校建築は画一的だったといわれる。教室は廊下の片側に一列に並べられ、4間(7.2m)に5間(9m)という戦前の定型が依拠として基本になっている。こういうパターンが依然として大勢を占めているのはなぜだろうか。昭和20年をさきにして、わが国の社会情勢は180度転換し、教育についても、制度は大きく変わり、教育の理念も根本的に変わった。しかし、前記のように学校建築については、基本的な部分ではそれ

ほどの変化はない。校舎は片側廊下で直線型が基本だし、教室も戦前の定型教室から基本的な変化はない。世上学校建築の設計は、ほかの建築に比べて容易さという通念がある。それというも、学校建築は前記のきまりきったパターンで設計とされてきたおかげ、別に学校間からクレームがつかうことがほとんどないからだ。

このようにして、学校建築はマンネリズム化に陥っているが、それは安易な設計をしているも、別にクレームがつかないから、建築家は怠けていて、よい設計をしようとしないう結果だともいえるし、教育の側を見ると、戦後教育制度は大きく変わったといえながら、授業のやり方の根本はそれと変わってはいないかだといえないこともない。

良識のある教育学者は、わが国の学校の授業は一斉授業に偏りすぎているという。一斉授業というのは、クラスの子供の平均的なレベルに合わせて授業が行われるから、理解の早い子供にはもの足らないし、理解の遅い子供は置いてきぼりにされやすい。その結果、必然的に落ちこぼれができる。一斉授業というのは、宿題に落ちこぼれをつくる学習指導法だといわれる。そして、そういう一斉授業が、わが国の教室における授業の大勢を占めているといわれる。このようにみても、わが国の学校建築が画一的なのは——特例を除いて——このような学習指導法とも関係がありそうである。教室の形態が戦前の定型教室と基本的な変化が見られないのは、その中で行われる学習形態が、実は戦前と基本的に変わっていないからだといえるかも知れない。

### III. 学校建築のマンネリズム化と教育改革

このように書いてくると、あたかも現状肯定論のように聞こえるかも知れない。しかし、実はそうではないので、学習指導のやり方は、少しずつ変わりつつあるので、

学校教育そのものが改革されねばならないという動きは、世界的に早くから出ていて、わが国だけが著しく遅れているということでは

ある。わが国でも、すでにその大綱は、昭和46年に公表された中央教育審議会の学校教育改革の構想の中に示されている。

今回の教育課程の改革は、それを受けて行われたものの一部であるといってもよい。それがスロウガンとしているゆとりと充実、学習指導の積極的な改革の引き金になるかも知れない。現在でもチーム・ティーチングのような新しい教育法を試みつつある学校もかなりある。今後は教育課程の改革によって、そのような新しい試みは行われやすくなり、一層滲透してゆくであろう。そしてそのことが学校建築の全般的な見直し、改革へつなげてゆくことが期待されるのである。

しかし、その際わが国では、学校建築を設計する建築家と、そこで実際に教育を行う教師とのコミュニケーションが充分に行われないという悪しき慣習がある。そのために、学校の要求が建築家に充分に反映されないという事実が非常に多い。そのことが建築家を不勉強に安住させた。また建築家に対する不信となつてはぬびつづける。

学校建築はほとんど鉄筋コンクリートで造られるようになって、しかし立派になった歓びは十分に感じられない。その意味が大切である。私にこんな経験がある。最近ある小学校をみせてもらった。その学校では、校舎を改築するにあたって、図書室をオープン・スペースにしたいと考えた。最近の進んだ学校では、以前の静かに閲覧するという場所から、子供たちがいつでも気軽に、便利に利用できる情報センターという性格に変わりつつある。そのような機能を持つ図書室は、文字通り校舎の中心にあつて、しかも壁も扉もないオープンであることが望ましい。学校はそう考えて、オープンの図書室を設計してもう設計事務所に依頼した。ところが、設計事務所では、そのような図書室はまだ見たことも、聞いたこともないし、オープンでは本がなくなって困るだろうと考えて、おせっかいにも書庫をつくった。学校側は設計希望を出していたので、すっかり安心していたが、でき上がったのを見て驚いた。書庫があるために、オープン・スペースに置く書架の予算が認められなくなり、困った事態が生じた。私を案内して下さった校長先生から、建築家の信用すべからざるものであるという苦情を聞かされた。

### IV. 新しい学習環境づくり

学校はそれぞれ教育の目標を持っており、それは学校が毎年作る学校要綱などにかかげられているが、最近は何と何と大に大切にしている教育とか、自主性を育てる教育というような趣旨の目標をかける学校が多くなった。このことは、これまでの学校教育が、落ちこぼれをつくる教育であるとか、自分で考えようとしないう創造力の乏しい子供が来てしまっているというような批判の高まりが、教育を行う側にも反省されるようになったらあらわれたいと考えるのである。そして、そのような目標を実現するためには、教育の方法をどのように改善したらよいかわからないことが真実に取り上げられ始めている。

先に自分たちの例は、子供たちが自主性をもって学習するために、自分自身でいろいろ調べ、考えながら学習を進めるような環境づくりが大切だといわれて、図書室に学習センター的な機能を持た

せようとし、これをオープンにしなければならぬと考えたのである。これと同じ考えで、子供たちが自分で調べ、自分で考えるために、そのための資料としての図書室を、できるだけ子供たちの身近に置くべきだという考えが生じつつある。龍山市の北条小中学校では、図書室を図書室から、教室に沿って設けられているワークラウンジに移した。また、札幌市の丘丘小中学校では、学年別に設けられたオープン・スペースの教室の中心にあるじゅうたんスペースに、図書コーナーが設けられている。

自主性をもって学習するという方向に学習指導が向けられる場合、教室の形態が問題になる。教師主導型で一斉授業が進められる場合には、従来の定型的教室で不自由を感じなかったものが、子供たちが自分で、あるいはグループで考え、研究しながら学習を進めてゆくこうとする場合、定型教室は狭すぎて、そのような学習の展開に適さない。教室に接してワークスペースを持っているある学校の学習風景を見せてもらったことがあるが、ちょうど社科の時間で、子供たちは教室にとどまるものもあれば、ワークスペースに出て行って、そこにあるテーブルを囲んで話し合っているもの、カーペットの上に乗って、ひとりで参考書類をひろげたり何か書いているもの、思い思いに、教室とワークスペースの好きなところに陣取り学習している風景は、いかにも自由で楽しそうであった。限られた教室スペースでは、窮屈なところはゆくまいいと思った。

### V. 建築家の創意工夫へ

いずれにしても、自主性をもって学習をするという指導のためには、従来の定型的教室からの脱皮が必要である。そのためには、教室のワークスペースを、自由に外向きによって拡張することのできるワークスペースを設けることも一法であろうし、このような学習の場の発展すすは、加藤学園や丘丘小中学校のようなオープン・スペースの教室へと発展してゆくであろう。このふたつの学校の学習指導組織は、すでに従来の一人の教師だけで、担任学習の学習指導というシステムからは脱却している。このような新しい学習指導のシステムは、チーム・ティーチングあるいは協力指導組織などといわれる。チーム・ティーチングを実施している学校は、わが国にもかなりあるがその方法はさまざまで、オープン・スペースの教室がなければやれないというわけのものではない。ただ従来のような、廊下の片側に教室が並んでいるという配置では、スムーズな運営は困難だし、子供の特性に応じて、さまざまな集団づくりが随時行われるように、大集団学習の教室や、小集団の学習スペースを可能にするような教室づくりが必要になる。そのような教室構成は、わが国では全く新しいものであり、建築家の創意工夫にまつところが多い。チーム・ティーチングを行っているいくつかの学校を見てもあったが、設計にあたって、もとより工夫されたら、チーム・ティーチングの教育がどんなにやりやすくなるだろうかと、残念に思うことがしばしばであった。建築家自身の学校建築への取り組み方を、根本的に変える必要が痛感したことであった。(日本大学教職・工学博士)